



感染症の専門家による分科会がオリンピック開催に関して意見を述べたところ、開催の可否の決定機関でもないのに、意見を述べるなど越権行為であると厳しく問われたのは先日のことです。ところが時期がやや遅れて、

もう一つ気になるニュースが流れました。コロナワクチンの接種を企業にも独自に計画してほしいというニュースの中で、「医師一人が1時間に二十数名をこなせば…」という表現があったのです。こちらは特別注目されることもなく、軽く聞き流されたと記憶しています。しかし一部の医療従事者は異和感を覚えたのではないのでしょうか。医療従事者は、万が一にも重篤な副反応が出た時のために、常にそのような患者に対応できるだけの時間的、空間的なゆとりを持っていなければ落ち着きません。ベルトコンベア上の商品を扱うかのような見方は、医療とは異質なものです。

およそ専門性の高い領域には、素人が口を挟む余地のない、研ぎ澄まされた技術が内在すると思います。ところが素人の眼には、その技術が簡単にこなされているかのように映ってしまうことがあります。技術者の技が高度であればある程、そのように映る可能性が高いと思われます。オリンピック開催については、あらゆる方面へ精通した知識と経験が求められるのに、私たちは無責任にも、自分の分かる範囲内の狭小な知識に基づいて意見を述べてしまいがちです。同じように、目の前でスムーズに流れていくベルトコンベア様の状況だけを見て、短絡的に「1時間に二十数名」という出来高計算をしたのは、同じミスを犯しているように感じます。分科会を糾弾した人々は、専門家集団としてのプライドを持っていたに違いありません。同様に医療従事者も自らの技にプライドを持つ限り、素人集団に振り回されるのではなく、医療従事者が取るべき態度を冷静に判断しなければならないと考えます。

内科医はしばしば外科の先生方から、神経質だとお叱りを受けます。なるほど私も細かいことをウジウジと考えてしまうのが、身に沁みついていることは事実です。かつて人気を博したTVドラマ田宮二郎版の『白い巨塔』でも、内科医は地味で伏し目がちで、キラキラとした輝きが見られないイメージに設定されていました。どうしてこんな感じが定着したのでしょうか。実は私は、内科医から慎重さを引き算したら、

内科としては成立しないと考えており、だからこそ「神経質」という評価は、内科医に対する称賛とも受け止めているのです。内科医は身体にメスを入れて中を覗くことが出来ないため、外に現れる情報のみから診断を予測していくこととなります。そうした修行生活の中では、言ってみれば痛手や失敗などを含む様々な経験を積み重ねていくこととなります。毎日繰り返されるそのような経験から、いつしか状況を慎重に判断する癖がついてしまうのだと思います。

例えば目の前に箱があり、その中に何かが入っているのかもしれないし、入っていないのかもしれないとします。もし何かが入っているとすれば、それは一体何なのか。それを蓋を開けずに当てっこして下さいと言われたと想像すれば、内科診療が理解し易くなります。難しいことに生体には、箱とは異なる不可思議な全体性がありますので、驚くような例も見られます。頭痛の訴えから心筋梗塞の診断に至るのは、まだ分かりやすい方です。下肢筋痛から膵臓癌が見つかったり、右下腹痛から最終的に左腎臓癌が発見された事例などを経験すると、慎重さが神経質なくらいに極まっていくことは致し方ありません。社会生活の中で何か物事を判断する際に、横からチマチマ、ウジウジした意見が出てくると、嫌気が差しますよね。しかし医療界においては、それこそが内科領域だけに与えられた使命であり、またリスクマネジメントとしての一つの重要な責務であると自賛したいのです。

さて…、筋肉注射が原因で敗血症を来し、多発肺炎から両側肺が潰れてしまった事例を診たことがある私は、たかが注射と雖も軽視することが出来ないでいます。消毒法一つとっても、技術が要りますからね。だからこそ冒頭のような「1時間に二十数名」という捉え方には、賛同しかねるのです。今回のコロナ禍は、内科学を学んだことのない人々が、医療の手技や検査の意義などを、目に映るだけの表面的な価値に貶めたと考えます。内科専門医としてのプライドを持つ私は、そのような幻の医療が常識化して、内科の質が劣っていくのが残念で仕方がありません。頭の片隅では、そんなちっぽけな誇りはAIの時代の単なる笑い種とも思えます。しかし自分は今までに培ってきた技術が自慢であり、世の中に省みられることのない日陰の場所であれ、それを今後も生真面目に守っていきたいと考えているのです。